

## 「変貌」に「国際化」を読む：森有正ノート1

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

131

(発行年 / Year)

2004-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002103>

## 「変貌」に「国際化」を読む —— 森有正ノート1 ——

江村裕文

「国際化」というのは、他の「～化」という表現と同様に、ある主体がその主体であることをやめるのではなく、その主体の持っている性質の一部が、「-x」なるものから「+x」なるものに変化することと、一般的に定義しておきたい。つまり、「国際化」というのは、日本なら日本が、日本でなくなるという「非日本化」というような変化のことをいうのではなく、日本なら日本のままではあるのだが、日本の持っているある種の性質なり属性が、「国際的」でなかった状態から「国際的な」状態に変化するということを意味するわけである。同様に、日本人の「国際化」というのは、日本人が日本人でなくなるということを意味するのではなく、日本人は日本人であり続けながら、その性質というか属性のある部分が、「非国際的」なものから「国際的」なものに変化するということとすることができる。①

このように、「国際化」が個人のある種の変化であるという前提に立てば、異文化との格闘の末、パリの地で客死した森有正の「国際化」論、ないしは異文化論があれば、そこから様々な有益なものを汲み取ることができるというふうに考えられるのであるが、彼にはそう名付けた議論は残されていない。そこで、彼の「変貌」という概念に関する議論を概観し、そこから彼の「国際化」論、異文化論を読み取ってみたい。

森氏は、「経験のある要素がもうそこに明確になろうとして、一つの決定的な命名を待つまでに成熟していること」、そしてそれが「そこに在る」ということ、「それはまた経験の深まりの一つの相でもある」とし、「私はそれを変貌と名付けようと思う。」と書いている。②

また別のところで、「そして私は、一つのことがわかり、理解すること

ができるのは、決して知的面だけの問題ではなく、もっと経験全体の変容、その成熟にほかならず、それを確定するものとして知的判断が表れてくるのだということを知るのである。そしてそれ以外には、わかるということは金輪際ありえない、と感ずるのである。私はそれを「変貌」と名づけたいと思う。」と書いている。③

つまり「変貌」とは、「成熟」であり「経験の深まり」であるということである。これを「国際化」論に並行的にあてはまるとしてみると、異文化経験の深まり、それが成熟にまで達したとき、「国際化」という変貌が生じることになる。

さてここで次に問題となるのは「経験」とは何かということである。彼は「感覚」と「経験」について次のように書いている。

人間がつくった名前と命題とに邪魔されずに、自然そのものが裸で感覚の中に入ってくるよろこび、いなそれは「よろこび」以前の純粹状態だ。……自分がまず在ってそれが何かを感覚するのだ、という事態から抜け出さなければならない。充実した感覚こそ、自我というものが析出されてくる根源ではないだろうか。私は「経験」と「体験」との根本的区別はそこに在ると思わざるをえない。……感覚の処女性という表現によって、私は、ものとの、名辞、命題あるいは概念を介さない、直接の、接触を、意味する。その接触そのものの認知を私は経験と呼ぶのであって、感覚が経験の一部なのではない。④

つまり、異文化という名辞や命題や観念の介在なしに「異文化」そのものと直接接触したとき、それは森のいう「経験」になる。そうでなければ、仮にそれが「経験」のように見えるものであっても「それが個人を定義するものに「変貌」することはむづかしい。⑤」のである。また「ましてや書物を読んだり、理窟を考えたりしてそうなるのでは絶対ない。」と彼は付け加えている。これは心すべきことである。彼は、それは「経験」ではなくて「体験」だからだといっている。自分自身を見極めることが不十分であったりして、自分では「異文化」そのものと直接接触したつもりでも、実は何らかの名辞や命題や観念が介在していたということがあるかもしれない。残念ながらそのときには「変貌」はおこりえない。「国際化」はありえないのである。

彼は「変貌」への過程をさらに別の表現で示している。

一つの別の「経験」がすでにある「経験」の根底に生れ、次第に形成されることによって、古い経験を覆すのである。それ以外にはありえない。それは乳歯が新しい成人の歯の生長によって覆され、脱落するのと同じことである。こういう道標は遅いこともあれば、非常に急速であることもある。単に時間の経過の長短ではない。⑥

「国際化」という一種の「変貌」が個人の「経験」の深まりによって実現される個人的営為であることを自覚するとき、森が示した「成熟」による「変貌」というプロセスの把握は、「国際化」を考える上でも非常に示唆的であることが指摘できる。

つまり、「国際化」は、異文化に関する知識の量の蓄積によるのではなく、また個人的な体験の蓄積によるのでもない。「国際化」に直結する、名辞や命題や観念の介在なしの異文化との直接の接触を「経験」できる感覚の持ち主だけが「経験」を深め、やがて「成熟」に達して「国際化」するのである。

異文化に対峙するときの森自身のアドバイスが辻邦生の著作の中に残されている。

私がパリという大都会になかなか馴染めないでいることが、当時の記録を読むとわかるのだが、この異質の都会へ同化してゆく途次に森先生と会えたことは、私の幸運であった。主観的には、私は東京よりも自分の肌に合う都会に来たと思っていたが、実際には、感覚的な抵抗がいろいろの形で表れていた。森先生は、そうした抵抗感のなかに、異質の文化を掴む手がかりがあることを示された。ややもすれば、息苦しさのために、抵抗感を回避し、安易な妥協点を見つけようとしがちであるが、先生は、そうなることを極力いましめられた。ともかく抵抗感に耐え、そちらに自分を合わせるようにし、決して対象を自己流にねじまげないこと——それを私にいろいろの形で教示されたのであった。⑦

そうして「国際化」したとき、人は自分がほかならぬ自分であることを発見するはずだと私は考える。この「自分に帰る」ということについて、森の生涯を「自分に帰る」生涯と見ている辻邦生は次のように書いている。

「自分に帰る」とは、同じ平面で起りうることではない。そうした苦悩と遍歴のすえに、その問題点の隅々まで納得了解して、それらを解消

し、その上に出たとき、はじめて「自己が自己である」ことを見いだしうるのである。⑧

辻邦生が森有正の生涯を「森有正氏は、……ひたすら自分にむかって遙かな旅をしていた。」⑨というとき、「経験」が深まり、「成熟」し「変貌」するというプロセスは、「異文化」の発見、「経験」の深化、「国際化」「自己の発見」というプロセスと全く同じものとしてとらえることができる。このことは、当該の個人がこのプロセスを辿ることが、何かお手本があってそれにしたがえば、言わば手軽にと言うか簡単に、「国際化」が実現されるというような何か生易しいものであるというようなことを保証するものではない。むしろ、「国際化」の過程も「変貌」の過程と同様、正しく自分との苦闘、それこそ命懸けの覚悟を我々にせまるのである。「国際化」であれ「変貌」であれ、それは安逸な現状、自己自身に別れを告げ、それがどういものであるかという何ら保証のない新たな自己への投企を強いるという意味で、また、自分自身が自己の存在そのものへの異議申し立ての矢面に立つことを回避できないという意味で、まさしくその人個人の危機を意味するはずのものだからである。

#### <注>

- ① この「～化」の議論については、江村（1988）等を参照されたい。
- ② 森（1967）（1969）p.13（1976）p.45（1978）p.11
- ③ 森（1967）（1969）p.19（1976）p.51（1978）pp.16-17
- ④ 森（1970）（1972）pp.48-49（1979）p.46
- ⑤ 森（1970）（1972）p.56（1979）p.53
- ⑥ 森（1970）（1972）p.56（1979）pp.53-54
- ⑦ 辻（1976a）（1980）pp.13-14
- ⑧ 辻（1977）（1980）p.106
- ⑨ 辻（1976b）（1980）p.80

#### <文献>

江村裕文（1988）「『国際化』について」『言語』大修館書店 Vol.17  
No.4, pp.122-123

- 辻 邦生 (1976a) 「先生との出会い」『展望』(1976.12) 筑摩書房  
『森有正 感覚のめざすもの』(1980.12) 筑摩書房 pp.9-17
- 辻 邦生 (1976b) 「ある生涯の軌跡」『思想』(1976.12) 岩波書店  
『森有正 感覚のめざすもの』(1980.12) 筑摩書房 pp.73-94
- 辻 邦生 (1977) 「経験を思索する道」森有正『経験と思想』「解題」  
(1977.6) 岩波書店 pp.169-205『森有正 感覚のめざすもの』  
(1980.12) 筑摩書房 pp.95-129
- 森 有正 (1967) 「変貌」『旅の空の下で』(1969) 筑摩書房 pp.7-62  
『思索と経験をめぐって』(1976) 講談社学術文庫 pp.39-95  
『森有正全集4』(1978) 筑摩書房 pp.5-58
- 森 有正 (1970) 「木々は光を浴びて」『木々は光を浴びて』(1972) 筑摩  
書房 pp.44-69 『森有正全集5』(1979) 筑摩書房 pp.42-  
66

(1995.3.15第一稿)